

シリーズ“キリストの証人”

は た ち
羽鳥ルツ作 「二十歳の世界」

< 前編 >

- 羽鳥ルツ (ナレーション) 困惑…。そうです。わたしは今、困惑しているのです。わたしの人生は、まだたったの 20 回目の春を迎えようとしている、そんな長さなのです。けれども、その来し方をつづろうと、こうやって原稿用紙に向かうと、途端にとてつもなく長くまるで霧の中のもののように、どこから手を付けていいのやら分からなくなってしまうのです。
- 福田早由里 ルツちゃん、難しい顔して何やってんの？
- ルツ ん？ 今度さあ、「この指とまれ」で、なんかわたしのあかし、つまり信仰の体験談のシナリオ書いてくれて頼まれちゃってさあ、苦悩しているわけさ。
- 早由里 へえ。ルツちゃんでも“苦悩”することあんの？
- ルツ するわよ。するする、モーレツな苦悩。2 キロやせちゃった。
- ナレーション この悩める乙女はわたし、羽鳥ルツ。二十歳の大学生です。自分ではいたって普通の女の子のつもりなのですが、たまに友達から、「ルツって人とどこか違うよね」などという声を耳にするのは、わたしがクリスチャンのためだと、よいように解釈しておきましょう。そしてもう一人の声の主は、わたしより年上だけど無二の親友、福田早由里さん。
- 早由里 だけどさあ、ルツちゃんの話とか言たって、なんかあったっけ、面白そうなこと？
- ルツ そうなのよ。そこが問題なのよねえ。わたしの人生のハイライトは、なんと言っても結婚かな。
- 早由里 だって、まだしてないじゃん。
- ルツ うん。いろいろ想像はするんだけど、やっぱ夢じゃムリか。そうになると、わたしのあかしとしては、小学校3年生の時かなあ。
- 早由里 何それ？ ああ、救われた時のことね。だけどよく覚えてないんじゃないの？
- ルツ うん。そうなんだけど、でもあれを語らずして今の羽鳥ルツはないもん。
- ナレーション …というわけで、重い筆を起こして、わたしのこれまでの人生で忘れられないことどもを、一つ、二つ、つれづれなるままに書いてみることにします。早由里ちゃんがそばで適当に合いの手を入れてくれるでしょう。

第1章 わたしの救われたこと

- ナレーション わたしは、父と母、兄、そして姉が2人、そんな家族の中に、年の離れた末っ子として生まれました。わたしの家族は全員クリスチャンで、特に父なんかは、彼から信仰とか神様とかを取ってしまったら何も残らないような、そんな人なのです。

わたしは、名前も聖書の中から“ルツ”というすてきな名前をもらい、そのような環境の中で、神様とか聖書とかお祈りとかに何も違和感など感じずに育ってきました。まるで生まれる前から通っているように教会に行き、祈り、聖書を読んでいたのです。今考えるとそれは、わたしがクリスチャンホームで生きていくための義務教育のようなものでした。そんな中で、わたしとイエス様のほんとの出会いの 때가訪れました。あれは、わたしが小学校 3 年の夏のことです。

- 父 ルツ。今晚は滝元先生の集会があるから、行々準備をしなさい。
- ナレーション わたしは父に連れていかれるがままに、その集会に行きました。広い教会 。残念ながら、お話の内容は覚えていないのですが、その夜、そこで語られた神様の救いの話は、小学 3 年生のわたしの心を捕らえたのです。
- 滝元明師 今晚、イエス・キリストを自分の救い主として、人生の主として受け入れようと決心した人は手を挙げて下さい。
- ナレーション 周りをちょっと見て、勇気を出して、手を挙げて…。
- 早由里 “手を挙げて、横断歩道を渡りましょう。”
- (効果音) (ピシャンと平手打ちの音)
- ルツ ちょっと早由里ちゃん。今、一世一代のまじめな場面なんだから、ふざけないですよ。
- 早由里 でもルツちゃん、そんなに強々殴ることないじゃん。鼻血出ちゃった。ティッシュちょうだい。わたしはただ笑ってほしかったんだってば。
- ルツ こんなところで笑いを取らなくてもいいの。でもやりすぎたか。これで神様にすべてをささげた献身者なんだから、信じられないよなあ。さあ気を取り直してさっきの続きを…。
- ナレーション 周りをちょっと見て、勇気を出して、手を挙げて…。先生の導かれるままに、祈ってもらうために前に進み出ました。
- 滝元師 ルツちゃんは一人で祈れるね。祈ってごらん。
- ナレーション なんて祈ったかはまるで覚えていないのです。けれどもなぜだか涙が止まらず、困ってしまったのを覚えています。
- 早由里 ふーん。3 年生でも神様の救いって分かるんだ。
- ルツ いや、その時には本当に“訳わかんないまま”って感じだったよ。
- ナレーション けれども、確かにわたしがイエス様の十字架のあがないによって罪を救^{ゆる}され、死から命に移され、神の子とされたのは、この時だったのです。残念ながらその大きな恵みは、小学校 3 年生のわたしには、はっきりと自分のものにできていなかったようですが、今、振り返ることのできる年齢になってやっと、その時神様がなしてくださった救いのすばらしさ、恵みの大きさを見ることができるようになりました。
- 母 ほんとにあの時イエス様信じてよかったわね、ルツ。ところで、自分が小さかった時、どうしてわたしの跡ばかりついて歩いていたのか、覚えてる？

ナレーション わたしの母は、たまに、一見何の脈絡もないようなことを言い出します。確かにわたしは幼いころ、少しでも母の姿が見えないと泣いていた弱虫だったのです。

ルツ いやぁよく覚えてないなあ。でも今考えてみると、人が死ぬのが怖かったんだよ。お母さんを追っかけ回したのも、「わたしの見ていないところでお母さんが死んじゃう」と思ったからじゃないかな。

母 言えてるわ。それが、あなたが救われた基礎になっているのよ。

ルツ は？

ナレーション わたしは、たまにはあの言っていることの意図が分からないときがあります。

ルツ どういうこと？

母 あなたには、異常なほど「死」に対する恐怖があったのよ。死の恐怖から解放されるのは、イエス様の救い以外にないの。だからあなたは、本能的に死を恐れ、本能的に救いを求めていたのよ。ほら、小さいころよくお父さんが入院したでしょう？ それでだと思うんだけど。

ルツ へえー。そうかぁ。初めて分かった、わたしが救われたきっかけが…。じゃあわたしが救われた時に訳わからないまま涙流したことは、ある意味で当然だったんだ。

ナレーション わたしは、その時の状況を、そしてわたしの心の中に起こったことを思い出した。と言うより、ありありと想像できたような気がしました。滝元先生はきっと、十字架でしなれ、よみがえって死の恐れを打ち破られた主キリストのことを話されたのです。その時わたしは小さな心の中で、「この方を信じれば、もう死は怖くないんだ。イエス様と一緒に天国に行けるんだ。イエス様はどこまでも一緒なんだ。」ということが、直感的に信じられたのだと思います。その安堵感。その喜び。いけない、また涙が出そう。

第2章 早由里ちゃんの「夢のお告げ」のこと

ルツ ところで早由里ちゃんっていつ救われたの？

早由里 え、わたし？ いつだろうねえ。小さい時から教会には行っていたけど、わたしって頭の悪い子だったから、よく分かんなかったんだよね、「イエス様があなたの罪のために死なれました」と言われても。うーん。いつかなあ。わたし、大学時代すごく遊んでいたじゃない。これじゃいけないと思って「教会にもう一度行こう」とって決心したんだけど、その晩さあ、すごい夢を見たんだ。どんな夢だと思う？

ルツ うーん。分からんねえ。

早由里 悪魔にね、イエス様を売り渡しちゃう夢なんだよ。

ルツ やるなあ。

早由里 でしょ！ それで教会に行ったら牧師先生に「もうダメです。わたしはこんな人間

です」って言ったの。そしたら先生がね、「そんなあなたのためにイエスは死んでくださった」ってお話ししてくれて。この時だよ、イエスが死んでくださったことによって、わたしが救われた、罪が赦されたって、初めて分かったのは、

ルツ ふーん。それこそ正真正銘「夢のお告げ」ね。わたしだって小学3年生の時、信じたは信じたんだけど、実際本当に意味が分かったのって、相当あとになってからだもんねえ。

早由里 なんかさっきから、その「あとで分かった」っての、やけに力説してない？

ルツ そうなのよ。これがわたしの一つのあかしなんだけど、救われるってことは、さっきお母さんも言ってたけど、決して偶然や成りゆきじゃないってこと。そして神様の救いは、必ずしも、その時自分に「救われた」という明確な確信があるかないかではなくて、「救われたい」という願いと、罪の悔い改め、そして神様の哀れみによってなされるものなんだ。

早由里 感謝だよな。

ルツ 本当だね。

第3章 ヤクザになり損ねた外山宏一君のこと

早由里 でもさあ、人が一人救われるっていうのは大変なことだよな。あいつの時だって。

ルツ うん、大変だったよなあ。

早由里 一時はどうなるかと思ったもんね。

ナレーション あいつとは、わたしの高校時代の友人の外山宏一君。校3のころから今まで仲良くしているグループの中の一人です。なぜだかその仲間の中では、わたしは姉御的存在で、みんなの悩みなんか聞かされたりするわけです。彼は高校ではゴイングマイウエイのツッパリで、友達に嫌われようが、先生に嫌われようが知ったことではなくそのために敵も多いようでした。朝は特に低血圧で機嫌も悪く。

外山宏一 今朝よう、ガンつけたやつがいたから殴っちまった。

ナレーション ……なんてことがよくありました。けれども、そんな彼がわたしたちのグループの中に初めて自分の居場所を見つけたらしくわたしたちにとっても、彼は、とてつもなく「いいやつ」になっていたのです。

宏一 おい、ちょっと出てきてよ。

ナレーション 彼はそうやって、気安く人を呼びつけるのです。卒業してからもよく呼び出され、話を聞かされました。

早由里 そうそう、話を聞きながら歩いて6時間っていうこともあったんでしょ？

ルツ うん。あの時は、彼が典子にホレてて、「どうしよう」って時で、わたしは「やめとけ」って言ったのに、彼が結論出なくて、そんなこんなで歩いちゃったってやつだ

よ。彼には言っていないけど、実はあの時わたし、歩きすぎて**腱鞘炎**になっちゃったんだよね。

早由里 あいつは貧乏で、喫茶店になんか入れなかったもんねえ。

ルツ 全くねえ。結局フラれて、ヤケになってケンカして…。

早由里 ヤケになんなくたって、あいつはケンカしてたじゃない。

ルツ そうだけど、あの時はさあ、人一人殺しかけたじゃん。ひどかったよなあ、あれは。

ナレーション 何やら物騒な話ですみません。もちろん、それまでのわたしの人生の中で、人を殺す殺さないなどということは、ドラマの中だけの話だったのです。ところが…。

宏一 おれ、またケンカしちゃったよ。相手は典子と同じ大学のやつだよ。隣で飲んでいたんだけど気に食わなくてよ。トイレに行った時にポコポコにしちゃった。でも、おれと中でキレちゃって、何も覚えてないんだ。友達に「もうやめろ、これ以上やると死んじまうぞ！」って止められて、ハッと我に戻ったら、血まみれのやつがおれの前に転がっていたんだ。入院したらしいけど、どうなったかな。

ナレーション でもわたしは、少しずつ気づいていました。どうにも抑えられない自分に気づいて苦しんでいる、本当の彼の姿に。そのころになってわたしは、少しずつわたしの信じている神様のことを語り始めたのです。わたしには、聞いてあげることと、神様の話をしてあげることしかできなかつたのです。なぜなら、彼の話はわたしの理解を超えていたのですから。彼もそれを承知でわたしのところに話をしに来たのでしょう。でも物騒な話はそれで終わりではありませんでした。ある日、いつものように彼に呼び出され、会ってみると、何かにおびえているようです。

宏一 おれ、怖いんだ。

ルツ どうしたの？

宏一 今さ、ヤクザから声がかかってんだよね、ならないかって。おれ自身、向こうの世界に入っちゃったほうが、ほかのやつに迷惑かけないで済むしよ。

ルツ 何言ってるのよ！ 絶対ダメだよ、そんなの。ダメだからね！

宏一 うん。実際、こっちの世界にも未練はあるんだよな。でもよお、お声がかかったってことはよお、なれってことで、それ断れば、向こうさんのメンツつぶすことになるから、ヘタすりゃ命ないだろうし、よくても指なくなるかもな。

ルツ ねえ、祈ってるよ。きっと何とかなるから、頑張って、外山。負けるなよ、祈ってるから。

宏一 おう、祈っていてくれ。

ナレーション わたしはただそれしか言うことができず、自分の無力さを歯がゆく思いながらも、ただひたすら祈り続けたのです。

< 後編 >

宏一 おれ、ヤクザになるの断ったら、命ないかも知れない。

ルツ 祈ってるから、頑張ってる。

ナレーション わたしの名前は羽鳥ルツ。二十歳の大学生。そしてクリスチャンです。「ヤクザになるか、ならないか」と物騒なことを言っているのは、外山宏一君。わたしの高校時代からの友人です。わたしは彼によく相談を持ちかけられるのですが、わたしには理解を超えた領域のことが多く、わたしはただ聞くこと、そして私の信じている神様のことを語ること、祈ることしかできないのでした。わたしの無二の親友の福田早由里さんにも事情をすべて話して、祈ってもらいました。

早由里 あの時は二人で必死に祈ったよね。

ルツ うん。よく祈った。彼のためにいつでも思い出して祈れるように工夫したしね。例えば時計を右腕にして、気になるたびに祈ろうって決めて祈ったり。

早由里 そのころだよ、あいつが少しずつ教会に来るようになったのは。

ルツ そうそう。ヤクザんとこ行く前に救われてくれればって思って、祈ってた。

早由里 だけどあいつは、そのまま“お断り”に行ったんだよね。

(効果音) (電話のベル)

宏一 (フィルター音) もしもし、外山ですけど。

ルツ 大丈夫？ どうだった？ ケガは？

宏一 (フィルター音) おう。大丈夫だ。まあ木刀で滅多打ちにされて、タバコの火つけられたりはしたけど、指もそろってるし。でも不思議なことに、恐怖とか怒りとかわいてこなかったんだよなあ。ルツの祈りのお陰かな。ま、とりあえず終わったよ。サンキュー。

ナレーション そうなんです。神様はわたしたちの祈りに答えてくださいました。彼は教会に来るようになったし、ヤクザとのことは大事には至りませんでした。ただ彼の中には、もっと深い問題があったのでした。

宏一 今回のことを乗り越えれば、すべてはうまくいって、おれはまともになれるんだと思ってた。だけど今、おれがこっちの世界でどういうふう生きていけばいいのか、全く分からなくなってしまった。今まで、ルツや早由里さんに神様や聖書の話聞かせてもらったけど、聖書の中に書いてあるような考え方で生きていくことは、おれにはできないと思う。もちろん、共鳴し、教えられる部分は多かったし、神様の存在は信じてるけど、ルツや教会の人たちのように、神様にすべてをゆだねられるほど、自分が整理できてない。って言うか、結局自分を信用してないんだと思う。でもおれは今、自分の中にある途方もなくでっかい、“空虚”という穴をふさいでくれる何かを求めているんだ。

ナレーション 彼は、その穴をふさぐために、お酒を飲み、ケンカをし、大麻にまで手を出すようになったのです。けれど、いつでも何かにおびえ、周りの者たちに、いいえ、自分自身に対しても、肩ヒジ張って生きていました。

早由里 そんな中でも感謝なのはさ、あいつが助けを求めに教会に来てたってことだよ
ね。

ルツ そうね。教会に来た彼を、わたしたちが捕まえて、話を聞いてあげて…。よく徹
夜とかしたじゃん。そうじゃないと、あいつ、ケンカしに街に繰り出していっちゃっ
たもんね。

早由里 それに、こっちもよく聖書の話とかしてあげてたしねえ。

ルツ それでもやっぱりあいつは、「クリスチャンにはなれません」だったよね。

早由里 こっちもいれい加減疲れちゃってさ。

ルツ でもさあ、あいつさあ、ちょっと調子よくなると教会離れようとしたよね。

早由里 でも、その度に何か問題抱えてボロボロになって教会に来るんだよね。

ルツ 神様がしっかりとつなぎ止めてくださってたんだねえ。

早由里 でも、もう忍耐と体力の限界だって感じだったな。

ナレーション 本当に、二人とも必死になって外山君の苦しさを分かってあげようとし、そして、
イエス様の救いを受け入れれば変わるのだということを、何度も様々な方向か
ら語ったのです。けれども彼は、「分からないから信じられない」といつも言っ
ていました。しまいには、二人とも、もう語る言葉が見つからないところま
で来ました。とうとう、彼のことから手を引いてしまい、祈ることしかしないと決め
たのですが、その時、不思議なことが起こりました。

宏一 おれ、聖書のこと、もっと知りたい。

ナレーション 彼は、わたしたちに聞くばかりでなく、自分でどんどん聖書を読むようになった
のです。そして彼は少しずつ“心”で神様を感じるようになりました。

宏一 今日、ふっと“神様っているんだなあ”と思ったんだ。(オーバーラップ)神様にゆた
ねるということがどんなことか、分かってしまったよ。(オーバーラップ)神様って、
おれのこと本当に愛して、大切に思ってくれてるんだね。

ナレーション わたしたちが一生懸命になって語っていたときは何も分からなかったのに、わ
たしたちがすっかりあきらめた途端に、この変わりようです。そしてある時、急に
こう言い出したのです。

宏一 おれ、昨日の晩、神様信じたよ。

ナレーション 早由里さんもわたしも、まるで夢を見ているようでした。

第4章 早由里さんとの永遠の友情のこと

早由里 本当に神様が働いてくださってるんだって実感できたよね。ほら、もしわたした
ちが語っている時にあいつが信じたら、わたしたち高慢になっていたでしょう？
神様の哀れみだよ。本当に感謝だよ。

ルツ なんか彼のことでいろいろ教えられたなあ。わたしには人のことを理解してあげ
られる経験は何もないけど、そんなわたしを神様は使ってくださいってこと

とか、救いの業を行うのは神様の力だけによることだとか。当たり前なんだけどね。

早由里 わたしたち二人のことについても教えられたじゃない。結局、あいつのことに關してだって、わたしたち、いいコンビだったよね。まずルツちゃんが教会に連れてきて、そしてわたしが語って、わたしがつぶれちゃったらルツちゃんが引き継いで。交互にさあ、神様に支えられながら頑張ったもんねえ。

ルツ 端から見れば不思議なコンビだよ。異様に仲いいしさ。7歳の年の差があるなんて思えないよね。

早由里 だってさあ。わたしたちはある意味で神様が与えてくださったパートナーだもん。二人が知り合ったのは、わたしが17、早由里さんが24の時でした。

ルツ あのころの早由里さんは、全然と言っていいほど笑わなくてさ、今とはまるで別人だったよな。わたしは“何が何でもこのネクラ女と友達にならなきゃ”って悲壮な覚悟したほどだもんね。

早由里 あの時は、“最後に一度だけニッコリ笑って教会から去ろう”とマジに思ってたのよ。でも心の中では、無性にだれかと本当の友達になりたかった。

ルツ お互いにさ、「本当の友達を教えてください」って祈ってたんだよね。

早由里 そう。それで周りを見回したところ、うちの教会って、女性すごく少ないじゃない？ルツちゃんぐらいしかいないから、友達にするにはちょっとガキっぽいと思ったけど、勇気を持って、そして努力して話しかけたわけよね。

ルツ そうそう。わたしたちって、最初は努力して友達になったんだよね。早由里ちゃんが結構努力しているいろんなこと話してくれるようになって、それからどんどん仲良くなったよね。

早由里 あれがよかったんだよ。ほら、毎日聖書を1章ずつ二人で同じところを読んでさ、教えられたみ言葉とか、その時思ってることとか、つらつら書いて週に2回くらいノート交換してさ、励まし合ったじゃない。二人とも同じところ読んでるはずなのに、教えられることはまるで違ったり、心に留まったみ言葉は違っていても、同じことを学んでたりね。

ナレーション わたしたちは、そこで本当に多くのことを学びました。そしてわたしたちは、その交わりの中でどんどん成長させていただいたと思うのです。“愛”について学びました。“忍耐”について学びました。“ゆだねる”ことについても、“悪魔の働き”についても...

早由里 でもさあ。ケンカじゃないけど、意見が合わなくて1時間黙り込んだこともあったし、お互いに話をしたくなくて、思いっきり避けていた時期もあったよね。それからわたしたちの仲をねたまれて、つらい思いもしたことがあったじゃない。

ルツ それでも不思議なことに、二人でいると安心するし、この友情は決して終わらないと確信できるのは...

早由里 「喜ぶ者と一緒に喜び、泣く者と一緒に泣きなさい。」このみ言葉がわたしたちに与えられているからだよね。

ルツ それに、いつでも神様が真ん中においてくださる。

早由里 でも、そういう風に言うと、わたしたち、なんだか優等生みたいじゃん。

ルツ そう思われると困るわなあ。わたし、一時ひどい時があったよねえ。

早由里 あったあった。あの時は本当にルツちゃん、教会からいなくなっちゃうんじゃないかと心配したよ。

ルツ あの時は、祈らない、聖書読まない、教会はサボるわ、お酒は独りで飲むわ。
でもさあ、わたしってずるい人間だから、そういうの、外には出さなかったんだよね。ひとがいるところではちゃんとクリスチャンしてたし。でも、早由里ちゃんはごまかせなかった！

早由里 本当に心配したよ。すっかり心閉ざしちゃってたもんね。

ルツ わたしもひどいよね。心配してくれてる早由里ちゃんに、「お願いだから祈らないで。心配しないで」って言ったもんね。

ナレーション そうなんです。あの時は相当に情緒不安定で、「人間なんて大嫌いだ」とつぶやいていたような暗黒の時でした。

ルツ あの時、早由里ちゃんが手紙をくれたんだよね。み言葉と、「わたしはルツちゃんを愛しています」って言葉と。

早由里 そうだよ。ルツちゃんが読みたくないと思わないように、大きい字で、しかも1行空けにしてさ。あれでも相当気を遣ったんだよ。

ルツ その細かい心遣いがうれしかった。早由里ちゃんが真剣にとりなしの祈りをささげていてくれたから、そのあと結構早く立ち直れたし、そのことを通して、自分は自分が思っているほど強い人間じゃなくて、本当に弱者なんだって教えられたし、感謝だなあ。

早由里 まあ、でもその逆もあったじゃない。

ルツ ああ、早由里ちゃんが教会サボって、家で電話線抜いて、こもっちゃった時とか？

早由里 そんなこともあったね。その時は、ルツちゃんがわたしのために祈ってくれたじゃない？

ルツ まさに「二人は一人よりも勝っている。...どちらかが倒れるとき、一人がその仲間を起こす。」ってやつだね。これは夫婦だけに語られるみ言葉じゃないんだよねー。わたしたち、実感しちゃってるもんねえ。

ナレーション 「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。」わたしたちはまさにそのような関係だし、そうあり続けたいと願っています。そして、それをなしてくださるのは神様ですし、これからも、わたしたちの真ん中においてくださる神様を、いつも見つめていきたいと思います。

第5 未完の章 ...これからのこと

(音楽)

(エンドミュージック)

ナレーション

早由里さんは、今度神学校に行き、そして牧師になりたいのだそうです。わたしは大学を出たら、できれば神学校に行って学び、教会とか、日本とか小さな枠にとらわれずに、わたしを救ってくださった神様のために、力いっぱい働けたらと思っています。でも、わたしも、早由里さんも、外山君も、まだまだこれから。どうなるかは神様のみ手の中です。

< 完 >